# 頼むからパパのいうことを聞いてくれ！

村雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
頼むからパパのいうことを聞いてくれ！

【Ｎコード】
Ｎ７２００Ｙ

【作者名】
村雨

【あらすじ】
ありえない死に方をしてしまった俺。
死に方が面白いという理由で転生！？
もらった能力は二つ。でもそのうちの一つはこれから行く世界ではまったく使えない！？
まあがんばって生きていこう
更新は不定期です

## プロローグ的なもの（前書き）

初投稿です。
すごく短いです。まあいろいろおかしいところがあると思いますが
大目にみてください。
感想待ってます。でもあまりひどいことは書かないでください。
誤字脱字あったら指摘してください。

## プロローグ的なもの

…ここはどこなんだ？
俺が意識を取り戻すと目の前に幼女がいた。
…なぜに幼女？
「あっ、やっと気がつきましたか」
いや、なんでこんなところに幼女が居んの？
「ああ、そういえば自己紹介がまだでした。私は神さまです。
そしてあなたにはラノベの世界へ転生してもらいます」
は？転生？何で俺が？っていうか俺死んだの？
「はい、死んでます。あなたが選ばれた理由が
それです。思い出してみてください」
えっと、俺は一人で暮らしていたはずだ。
んで、会社の同僚と飲みに行く約束をした。
そして出かけようとして箪笥の角に左足の小指をぶつけたんだ。
…ん、こっからの記憶がない！？まさか俺は
箪笥に足をぶつけて死んだのか！？
「いえ、違います。実際はそのショックにより気絶。
そして運悪く卓袱台に頭をぶつけて死亡しました。」
よかったよかった…ってどっちもどっちじゃねーか！

ん、まてよ、まさか俺が選ばれた理由これ？

「はい、そうです。あなたの死に方が面白かったからです」

おい！適当すぎだろそれ！

「まあいいじゃないですか。どうせ家族も居ないんだし」

…まあそうだが。…仕方がない、どこの世界に行くか教えてくれ

「それは内緒です」

…は？内緒？

「でもその代わりに好きな能力を二つあげましょう」

じゃあ一方通行のベクトル操作能力と黄金率をくれ

「分かりました。それではがんばってください」

最後にひとつだけいいか？

「何でしょう？」

結局俺はどこの世界に行くんだ？

「…まあいいでしょう。教えてあげます。

それは『パパの言うことを聞きなさい』です」

おいそこベクトル操作意味ねえだろ！

「家事全般は一流以上にできるようになってます。
それでは今度こそいってらっしゃい」
「まあぐだぐだ言ってもしょうがない。行ってきまーす」
俺は目の前に現れた扉からでていった。

## 小鳥遊家での出来事（前書き）

今回も短いです。長いのを書いている人のすごさが
小説書いてみて初めてわかりました。
誤字脱字あったら指摘してください。

## 小鳥遊家での出来事

え～突然だが、俺が転生してからもう２０年もたった。

なんだって？時間が飛びすぎ？だってとくに何もなかったんだから仕方がない。

本当に何もなかったかって？うーんそうだな

俺が生まれてすぐに両親が事故で死亡。

親類がいないんで孤児院に預けられるところだったのを

親父の親友の瀬川さんが引き取ってくれ、俺は瀬川海斗になった。

それから一年位たって祐太が生まれた。両親はもちろん

祐理姉や俺もすごく喜んだ。

それから数年たって父さんと母さんが死んだ。

んでそっからは大体原作通りなはずだ。

まあ原作と違うところといえば、俺の黄金律で金には困らなかったし

あの幼女のおかげで家事ができたから祐理姉の負担を減らせた。

後は祐理姉の趣味を偶然知ってしまい、強引に引きずりこまれ

オタク趣味を持つようになった。

まあ前世でも少しはオタクっぽかったからよかったが…

まあそんなこんなでいろいろありもう原作は覚えていない。

まあいいか。精一杯がんばって生きていこう。

俺がこんなことを考えながら歩いていると目の前に表札があった。

「おお、これが小鳥遊家か」

俺はそんなことを言いながらインターフォンを押す。

「「いらっしゃ～い、海斗（おいたん）」」

そこには祐理姉とその娘ひながいた。

「遊びに来たよ祐理姉、ひな」

「そういえば祐太はどうしたの？」

「ああ、祐太なら用事があるとかで大学にいった」

「そう、残念ね。祐太をいじって遊ぼうと思ったのに」

「はは、また今度にしてあげなよ」

そんな話をしながら俺たちはリビングに向かう。

そこには空ちゃん、美羽ちゃん、信吾さんがいた。

「いらっしゃいお兄ちゃん」

「いらっしゃい叔父さん」

「やあ、よく来てくれたね海斗君」

三人に迎えられた俺はそのままイスに腰掛ける。

「そういえば海斗、お昼ご飯食べたの？」

「いや、まだだけど」

「ちょうどよかった。一緒に食べましょ」

そういうと祐理姉はキッチンのほうへむかっていった。

「あっ、手伝ってきますね。信吾さん」

「ああ、たのむ。ひさしぶりに君と祐理の料理を食べたい」

俺は祐理姉を追ってキッチンに向かった。

「祐理姉、手伝いにきたよ～」

「あら、待っててくれてもよかったのに。まあ手伝ってもらいましょうか」

「何作るんだ？」

「ひなの大好きなハンバーグね。後はカルボナーラかしら」

「よし、カルボナーラは俺が作るから祐理姉はハンバーグ頼む」

「ふふっ、まかせたわよ」

「ああまかされた」

テーブルには出来上がったカルボナーラやハンバーグがのっている。

「わあ、どっちもおいしそう！」

「まったく、お姉ちゃんたら。まあほんとにおいしそうですけどね」

「ひな、はんばぐたべるー！」

「ほんとにおいしそうだね祐理」

「じゃあ、食べましょう」

「「「「「いただきまーす」」」」」

「あーおいしかった！」

「お姉ちゃん食べ過ぎてない？」

「ななな何言ってるのよ美羽！！そんなに食べてないよお兄ちゃん！」

「え～、空ちゃんは俺の作った料理おいしくなかったのかな？」

「違います！おいしかったです！」

「ごめんごめんちょっとかわいかったからね」

「か、かわいい？……え、えへへ／／／」
「あらあら、いいわねぇ若いって」
「ま、まあ海斗君ならいいんじゃないか？」
「な、なに言ってるのよお父さん！／／／」
「じゃあそろそろ帰るよ。」
「もう帰っちゃうの？おいたん？」
「うん、用事があるからね」
「また来なさいよ海斗」
「今日はありがとう海斗君」
「さようなら叔父さん。また来てください」
「またね～おいたん」
「また来てくださいねお兄ちゃん」
「ああ、また来るよ」
俺はそう言いながら自宅へと向かった。

## 路上観察研究会（前書き）

なんかいろいろおかしいですが、勘弁してください。
今回も短いです。

## 路上観察研究会

「佐古先輩、莱香、遅れてすいません」

「やっと帰ってきたのかね海斗君」

「おかえり海斗」

あの後、小鳥遊家をでた俺は家に帰り、ここロ研にやってきた。

「今年はどうですか？」

「ああ、すでに一人入ったのだよ！」

「そうですか。んでそいつはどこに？」

「すまない。忘れていたようだ。莱香君、仁村君を呼んできてくれたまえ」

「……わかった。」

何かを練習していた莱香は立ち上がり、新しく入った仁村を呼びにいった。

「佐古先輩、何か用ですか？」

「やあ仁村君、海斗君が戻ったから自己紹介してもらおうかと思ってね」

「仁村浩一です。よろしくお願いします海斗先輩」
「こちらこそよろしく。それと先輩はやめてくれ」
「分かりました。じゃあ海斗さんでいいですか？」
「ああ、それでいい。それにしてもなんでロ研に？」
「いや、それがですね…そこの佐古先輩に無理やり…」
仁村がそう言ったとたん佐古先輩が慌て始めた。
「ぎくっ！ななな、何のことだい？」
「…佐古先輩？人に迷惑かけたらいけないって言いましたよねぇ？」
「ひっ、おおお落ち着くんだ海斗君、話せばわかる！」
「そうですね、Ｏ☆Ｈａ☆Ｎａ☆Ｓｈｉしましょうか」
「い、いやだ、助けてくれ！莱香君、仁村君！」
佐古先輩はそう言うが、二人とも目を合わせようとしない。
「そ、そんな！何か言ってくれ莱香君、仁村君」
「……自業自得」
「ノ、ノーコメントで」

二人に見放された先輩はｏｒｚの状態で固まっていた。

「さあ、行きましょうか先輩？」

「いやあああああ！！！」

先輩の叫び声が響き渡る。

「それで、今年入りそうなのはもういないのか？」

「……会長がもう一人いるって」

「そうなのか、俺はてっきり「そうなのだよ海斗君！もう一人は酔っ払って寝ているよ。」……」

先輩は今まで端っこに転がっていたはずなのに、急に会話に参加してきた。

とりあえず、なんかむかついたからもっかいボコっておいた。

## 路上観察研究会２（前書き）

遅くなってすいません。

## 路上観察研究会2

「…それで酔っ払って寝ているやつはどこに居るんです？」

「もうそろそろ起きて来ると思うよ」

さっきぼこったばかりなのにまた先輩は復活してきた。

…ハッ、これがギャグ補正だとでもいうのか！？

まあどうでもいいが。

「あの～すいません。ここどこですか？」

ん？この声はまさか……

「おお、起きて来たようだよ海斗君」

「えっ、いま海斗って言いましたか？」

「……裕太、何でここに居るんだ？」

「あっ、海斗兄、海斗兄こそ何でここに？」

いやな予感が的中してしまった。

「俺はこの研究会のメンバーだ。裕太は？」

「いや、確か俺は居酒屋でコンパの最中だったはずだけど…」

「海斗君？つかぬ事をお聞きするが、そこの瀬川君とはどんな関係で？」

「どんな関係もなにも、裕太は俺の弟ですよ」

俺がそう言った瞬間、先輩は脂汗を大量に脂汗を掻き始めた。

「すみませんでした！！許してください！！！」

「…何したんですか？」

先輩から詳しい話を聞いてみると、どうやら裕太は仁村と一緒に連れてこられたらしい。

「まあ、いいです。それより裕太、お前このサークルに入るのか？」

「うーん、まあほかにあてもないし入ってみようかな」

「それに、海斗兄がやり過ぎないように見ておかないとね」

そう裕太がいった。まあ、確かにやり過ぎたかも知れないがそれは昔からのことではないか。そう思っていると

「ありがとう裕太君！！君には感謝してもしきれないよ！！」

「えっと、佐古先輩でしたっけ、なにかされたんですか？」

「それが、ちょっとドジって海斗君に……」

そこまで言ったとたん佐古先輩は何かを思い出したように

震えだした。

「ちょっ、大丈夫ですか先輩！？」

「先輩は海斗さんにお話されてたからね」

「……自業自得」

「なるほど。海斗兄にお話されたのか」

裕太は先輩がおかしくなった理由がわかったようで
仁村や莱香と話始めた。

「はじめまして。瀬川裕太です。これからよろしくお願いします」

「……織田莱香。莱香ちゃんって呼んで」

「それはちょっと…莱香さんでいいですか？」

「……ん、いいよ」

裕太はさっそく莱香のペースにはまってしまったようだ。

「俺は仁村浩一。君がコンパのときに酔っ払っちゃったんで俺が連れて帰ったんだ」

「そうだったのか、ありがとう仁村」

「というか裕太、お前酒飲んだのか」

「違います海斗さん、ノンアルコールビールだったんですけど…」

どうやら裕太はノンアルコールビールで酔っ払ってしまったようだ。

「ま、まあいいじゃないか海斗兄、それより佐古先輩はどうにかしなくていいの？」

「大丈夫だ。いつものことだからな」

「いつものことって…佐古先輩大丈夫かな」

裕太は先輩の心配をしている。やさしいやつだな。

「裕太、そろそろ帰って飯にするぞ」

「わかったよ海斗兄。そうゆうことだから、仁村、莱香さんまた来ます」

「じゃあ、また今度〜」

「……ばいばい」

仁村や莱香に帰る事を告げて俺たちは家に帰った。

そういや佐古先輩どうしたんだろう。……ま、いっか。

## 裕太…可哀想な奴（前書き）

おそくなってすいません。

## 裕太…可哀想な奴

あのロ研での出来事から数日後。
俺と裕太は小鳥遊家に来ていた。

「いらっしゃい海斗お兄ちゃん、裕太お兄ちゃん」

「こんにちわ空ちゃん。そういえば、美羽ちゃんひなは？」

いつもだったらひなが一緒に出てくるはずなのに…今日はどうしたんだ？

「美羽はリビングで宿題やってて、ひなはいまお昼寝中だよ」

そんな話をしながら俺たちはリビングに向かっていく。

「こんにちは美羽ちゃん」

「こんにちは。海斗さんに叔父さん」

「そういえば宿題はおわったの？」

「たった今終わったところです。今日はよろしくお願いしますね」

俺と美羽ちゃんが話をしていると、裕太が隣で「俺だけ叔父さんって…」
などと呟いていたが気にしてはいけない。

「ああ、そうだね。今日から三日間しっかり面倒を見させてもらう

よ」

「これから三日間は海斗さんの作る料理が食べられるんですね。楽しみだな～」

「ははっ、任せてくれ精一杯おいしいものを作らせてもらうよ」

そういえば空ちゃんはどこに行ったんだろう？
そんなことを考えていると…

「ほら、ひな。海斗お兄ちゃんと裕太お兄ちゃんが来たよ。ご挨拶しなさい」

「あう～～ねーたん、ひなまだねむい～～」

どうやら空ちゃんはひなを起こしに行っていたみたいだ。

「おはようひな。でももうお昼ご飯を食べる時間だよ」

「あれ～なんでおいたんがいるの～？」

どうやらひなは俺たちが来ることになった理由を覚えていないらしい。

「ひな、海斗お兄ちゃんたちはね、お父さんたちがお仕事にいって
て私たちの
面倒を見る人がいなくなるから来てくれたんだよ」

「そうなんだ～。よろしくねおいたん」

俺たちがそんな話をしていると裕太が部屋の隅で「ひなには存在を忘れられてる…」
とか言っていじけていた。
「そろそろお昼ごはんをつくろうか。空ちゃん、一緒に作ってみる？」
「ふえっ、い、一緒に作っていいの？」
「お姉ちゃんよかったじゃん。海斗さんと料理ができるなんて」
ん？どうやら美羽ちゃんも一緒に作りたいみたいだ。
「美羽ちゃん、よかったら美羽ちゃんも一緒に作る？」
「えっ、ほんとにいいんですか海斗さん！」
「あ、ああ。いいけど、何作ろうか？」
美羽ちゃんの反応が大げさでびっくりしてしまったな。
「私は久しぶりにチャーハンが食べたいです！」
「私もチャーハンがたべたいな」
「ひなもちゃーはん食べる～」
「それじゃあ、チャーハンにしようか」
そういえば裕太はどこに行ったんだ？

「なあ空ちゃん、裕太どこ行ったか知らないか？」

「裕太お兄ちゃんなら、「これからバイトがあるから帰るよ」って言ってたよ」

……あのバカは何しに来たんだ…

## ……もう一人作ろうかしら（前書き）

今年最後の投稿です。サブタイおかしいです。
それでは皆様、よいお年を。

**……もう一人作ろうかしら**

俺の目の前で睨み合う空ちゃんと美羽ちゃん。
美羽ちゃんの手にはトランプが一枚、空ちゃんの手にはトランプが二枚あった。

「さあ美羽、早く引いて！」

「そんなにあせらないでよお姉ちゃん」

そう、二人はババ抜きをしていたのだ。
もともとは四人でやっていたのだがひなは眠ってしまい、その後俺が抜けてこうなってしまった。

「いいから早く引いてよ美羽」

「う～ん、どっちにしようかな……よしっ、これ！」

美羽ちゃんがそう言って手を伸ばした時、空ちゃんがうれしそうな顔をする。その瞬間、美羽ちゃんがもう片方のカードを引いた。

「ああ～っ、また負けた～」

「またお姉ちゃんの負けだね。これで十連敗だよ？」

そう、さっきから十回ほどやっているが空ちゃんは全部負けている。

「空ちゃんは感情が顔に出すぎだよ」
「えっ、私そんなに顔に出てたのお兄ちゃん？」
「まさか気づいてなかったのお姉ちゃん？」
「そ、そんなことないわよ！わざと、わざとなんだからね！」
「え～ほんとかな～、あやしいな～」
空ちゃんと美羽ちゃんが言い合っている間に電話がかかってきた。
「はい、小鳥遊ですが」
「あっ、海斗？よかったちゃんと来てくれてたのね」
「俺はいるけど裕太はバイトがあるとかで帰ったよ。それよりもう着いたの？早いね」
「違うわよ。まだ着いてないわ。乗り換えしないといけないからいま次の飛行機を待ってるの」
目的地に着くには早すぎると思っていたがやっぱり違ったようだ。
「それより裕太が帰ったって言ったわね？
……まあいいわ。裕太がいなくても海斗がいるなら」
「裕理姉それ言いすぎなんじゃ……いや、まあいいか」

二人がそんな話をしているとき
「あれ、いま誰かに酷い事を言われた気がする」
地味に察知能力？が高い裕太であった。

「それじゃ、後三日ほどみんなの事よろしくね」

「ああ、分かったよ。祐理姉も信吾さんの体調とかに
気をつけてあげなよ？」

「わかってるわよ。なんていっても私の旦那様だからね。
……いい機会だからもう一人作ろうかしら」

「あはははは、じゃあね祐理姉」

話が長くなりそうだったので俺は電話を切った。

「海斗さん、誰からだったんですか？」

リビングに戻った後、美羽ちゃんから声をかけられた。

「えっと、祐理姉からだったよ」

「なんていってましたか？」

「俺に三日間よろしくって言ってたよ。
……それともう一人作ろうかしら。って」

空ちゃんが顔を赤くしながら
「ふ、二人目って子供のこと？」

と聞いてきた。

「あ、ああ、多分……」

気まずい沈黙が流れる。

「空ちゃん、美羽ちゃん、何かゲームでもしない？」

「そうしましょう！海斗さん！お姉ちゃんもそれでいいよね？

「うん、そうね！そうしましょう！」

俺たちは三人でスマ〇ラをやり始めた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7200y/

頼むからパパのいうことを聞いてくれ！

2011年12月31日18時04分発行